

「横浜国際港都建設審議会」第5回第2部会

平成17年11月8日(火)

《出席委員》小林重敬委員(部会長)、飯沢清人委員、岡部明子委員、加納重雄委員、
黒川勝委員、高梨昌芳委員、トイ チャールズ フェラー委員、
バルティヤ イワティ チャンドラセイ委員、横山正人委員、吉村恭二委員
＜欠席＞ 志村善一委員、萩原なつ子委員、長谷川まや委員、森敏明委員

議事

【部会長】 それでは、最後の部会になりますが、第2部会を開かせていただきたいと思います。

スケジュールでご案内かと思いますが、先日、第2回の起草委員会を開かせていただきまして、これまで各部会で議論された内容を、起草委員会としてこういう方向で取りまとめようという案をつくりました。ただし、これについては、まだまだいろいろ検討すべきことが残っております。この段階では、むしろ、きっちりすべてをまとめるのではなくて、それぞれ1回ずつ部会が残されておりましたので、部会のご意見をいただいて、部会が全部終了した後、最後の第3回起草委員会でまとめようということになりました。

今日は第2回の起草委員会のとりまとめに基づきまして事務局から報告いただいて、自由なご発言をいただければと思っております。それでは早速、議事次第に従って議論を進めてまいりたいと思います。

最初に、第2回起草委員会とりまとめについてご報告をお願いいたします。

事務局より資料説明

【部会長】 どうもありがとうございます。第2回の起草委員会で、取りまとめの方向をこのような形で考えたかどうかということでまとめさせていただきました。資料2、A3のペーパーにあるように、カテゴリーとしては4つ用意して、横浜の将来像、目指すべき都市像、実現の方向性、さらに、実現のための基本的姿勢という形で4つに整理し、その詳細が、先ほど紹介いただきましたこの冊子になっているということです。ちょっと質問したいんですが、このメインキャッチフレーズはどのように考えられているんですか。

【事務局】 次回の起草委員会までに案をつくって、起草委員会の中でご議論いただきたいと考えておりますが、本日の部会の中でもご意見をいただけましたら、そういったもの

も踏まえて検討していきたいと思っております。

【部会長】 A3版の資料の一番左側に横浜の将来像があって、メインキャッチフレーズとありますが、これにはまだ言葉が入っておりません。起草委員会で議論しようということになってはいますが、いろいろ情報をいただければと思いますので、もしあれば、その点についても何かご指摘いただきたいと思います。また、全体の構成、市民力や横浜らしさというふう将来像をまとめたことをはじめとする、このようなまとめについて、さまざまな角度からご意見をいただければと思っております。どうぞ。

【委員】 過去何回かこの部会で議論していますから、大枠のところは非常によくまとめていただいたなという感想を持っております。私からは3点ほど各論といいますか、内容について意見を言わせていただきたいと思います。まず、8ページの黒丸の2つ目のところですが、「空港、港湾、道路、鉄道が一体」というのは、いわゆる横浜らしさというか、京浜の羽田空港、横浜港、そして鉄道、道路と、こういう一体化した考え方を持っていたいてありがたいと思います。その次の新産業の分野ですけれども、歴史的に見ると、例えば、鎖国をしていた時代は、物資は江戸か大坂に集められて、そこで取引が行われて、また全国各地に行ったという歴史があるわけですけれども、開港して、例えば生糸などは、今まで江戸や大阪に行っていたものが、直接横浜に来て、横浜から世界に送られていくようになり、言ってみれば流通革命が起きたわけです。そういうことを考え合わせると、横浜は新しいビジネスモデルをつくる歴史的な経験があると私は思います。そういうことを考えると、新しい産業の分野、新産業の分野に対して、積極的に挑戦をしていくまちという位置づけもできるのではないかなと思います。言わんとしていることは同じことだと思いますが、具体的な表現の中で、私は新しい産業、新しいビジネスモデルに対して挑戦をしていくというような考え方が必要じゃないかなと思います。

それと、10ページのところですけれども、1人ひとりがこういった実現のための基本姿勢の中で果たせる役割があるという考え方は私は賛同いたします。これは以前送られてきた資料の市民提案発表資料の中に、子ども未来考エールという市民グループが、私たちのつくる未来家族という中で、中学校区での身近な生活を考えるという資料を用意していただいたんですが、これを見ていて私が思ったのは、各世代ごとも持っている役割があるのではないかなと。子供は子供なりの役割、青年は青年なりの役割、壮年は壮年なりの役割、熟年世代は熟年世代の役割というものがあるんじゃないかなと私は思います。例えば、子供の持つ役割というのは、自分自身のことに対して責任を持つ、青年になれば、自分た

ちの地域に対して責任を持つと、壮年になってくると、日本全体を含めた、いわゆる国家間であるとか、世界間であるとか、そういったことに対して責任を持つし、熟年世代は次の世代に継承していく責任を持つと、こういう世代間を切り口とした責任を果たす役割というものも、横浜市民として持つことも考えられるんじゃないかなと思います。

それと、同じ10ページですけども、「私たち事」という造語ですが、こういうものに対して造語を使うことが適当かどうかということについては議論をしたほうがいいと思うんです。こういう横浜市の未来にかかわる大きなテーマを決める、言ってみれば横浜市の憲法みたいなもの、基本的な方針を定めるものでありますので、辞書に出ていない言葉を使うことはどうなのかなと。「私たち事」という意味は非常によくわかります。ただ、これは共同体ということですよ。私たちの共同体に対してどう責任を果たすかと、こういうことですので、あえて造語を使う必要があるのかなという疑問を持っております。

それと、最後、1点ですけども、前にも少しこれは議論が出ていたかと思うんですが、外国人労働者という表現の方法なんですけれども、私も果たして外国人労働者という表現が正しいかどうかということもありまして、例えば、外国人の就労にかかわる環境とか、そういう表現のほうがいいのではないかなと思います。何となく外国人労働者というとブルーカラーの、いわゆる単純労働者的なイメージが非常に強いものですから、そうじゃなくて、要は、卓越した技術であるとか、あるいは技能を持っている外国人の方が自由に横浜で仕事をしたり、研究したり、そういうことが可能な地域をつくっていくという方向のほうが、より身近ではないかなと私は思っております。

それと、同じことかもしれませんが、外国人市民という言葉なんですけれども、果たして外国人が市民なのかなという基本的な問題があると思うんです。市民権があるのかどうか。いわゆる権利があるということは、当然、義務も発生するわけですから、外国人市民と日本語に直すと非常に広範囲な言葉になっていますので、これでもいわゆる意味は通るんですけども、果たして市民権という権利を行使できるかどうかという問題になってくると、少し疑問が出てくるなということをおし添えておきたいと思います。

以上です。

【部会長】 ありがとうございます。今、5点ほど提起いただいたんですが、最初のビジネスモデルは実現の方向性のところには書かれてはいないんですけども、例えば、めざすべき都市像のⅣのところでは、新しい産業という言い方が出てきていますよね。これはその両者の関係をちょっと考えてみたいんですけども、大きい都市像としてはそういう

ことがうたってあって、実現の方向性の中にそういう言葉が必ずしも十分入っていないということなんだろうと思います。ですから、その辺の関係をどのようにとらえたらいいのかという議論にもなると思うので、むしろ問題提起として、起草委員会で少しその辺を議論させていただきたいと思います。

それから、世代間の役割については、確かに非常に明解にお話しいただいたので、これを入れるとしたら、先生としてはどの辺に入れたらいいというご指摘はありますか。

【委員】 そうですね、市民の基本姿勢ということは、当然、市民がこうあるべきだと、いわゆる、こういうことを目標としようということをここで明記している話だと思いますので、「一人ひとりの基本姿勢」のところの中に、いわゆる世代ごとの責任の果たし方というんですか、そういうような考え方を入れたらどうかなと思うんですけれども。

【部会長】 わかりました。そういうご意見ですね。

それと、「私たち事」というのは、事務局としては、これは共同体というか、コミュニティーを言いかえた言葉ではないかというご指摘がありましたけれども、その辺はどうなんでしょうか。

【事務局】 1つの造語ではあるんですが、市民の皆様のグループ議論の中で、私ごとということよりは、むしろ、これからはいろいろな物事を私たちのことだということで、「私たち事」という造語で訴えていったらどうかということがあったものですから、今回の資料の中に盛り込んだわけでございますけれども、私たちの共同体のこととか、ほかの言い回しができるかどうか、考えていきたいと思います。

【部会長】 その辺はまた委員の中でご意見があればいただきたいと思います。

あと、外国人に関係したお話がありますので、この辺はまた関係者がたくさんいらっしゃいますので、ご意見をいただきたいと思います。それに関連して、もし、ご意見をいただければと思います。

【委員】 外国人に関連してというよりも、目指すべき都市像の中に、もしかすると含まれているのではないかと思います。今までの議論の中でも、多様な異なった文化、言いかえれば、多文化共生都市というふうな概念があったと思いますし、また、今後、必要なのではないかなと思います。少なくとも、現状で、横浜には151か国の国籍の人々がいらして、また、今後も増えるのではないかなと思いますので、そういうことも含めて、どこかに入れる必要があるのではないかと思います。「世界の知と人材の交流拠点として」となっていますが、もしかすると、文化という側面が、いわゆる生活意識と価値という意味

でいえば、必要な文言と概念じゃないかと思います。それと、実現の方向性の中の（6）の「世界の都市と交流し貢献する世界に開かれた横浜にしよう」というところの中で、「世界で活躍する人材を輩出し、様々な国の人々が」と書いてありますが、国というのが何か少しひっかかるんです。都市の問題を言うときには、むしろ、多様な文化背景を持つというふうに言ったほうが、市としてなじみやすいのではないかという気がいたしました。

それからもう1つ、もしかすると方向違いかも知れませんが、実現のための基本姿勢というところで、（2）横浜市の基本姿勢と書いてあるんですが、これは横浜市の自治体としての基本姿勢なのか、あるいは行政の基本姿勢なのか、横浜市全体を漠然と言った形での姿勢なのか、ここをはっきりしておく必要があると思います。中身を見ると、都市経営の進め方や何か云々のところで、横浜市の行政というか、自治体というふうなことなのではないかなという気がします、あえて横浜市というところで表現をとめていいのかどうか、このことに対する疑問というか、むしろ教えてほしいということでもあります。

それから、第3部会などでどのように論議されたかわからないので教えてほしいんですが、いわゆるガバナンスの問題として、都市の統治機能は行政だけが担うんじゃないで、むしろ企業も、あるいは市民も担うというガバナンスの概念がどこにあるとはっきりするのではないかなと思います。新しい公共というのは一応そういう意味だろうと思いますが、20年後というふうに考えますと、むしろ新しい公共というのは今言っている概念であって、一生懸命探しているところですけども、基本的には、企業も自治体というもののガバナンスを担っていると、それから、市民もそれを担っているし、行政も担っているというものが、多分、新しい行政というか、そういうものじゃないかと思います。そういう意味では、都市の統治機能として、あるいは役割としてのあり方がもう少し明確になっていたほうがいいかなと思いました。

【部会長】 委員のお話は、国という言葉が表に出るよりも、多様な文化を背景を持った人々が集まるということ、いろいろな国の人が集まるというよりも、多様な文化を持った方々が集まって、それが交流するという形で表現したほうが、より今の社会では適切なのではないかと、そのことの表現が必ずしも明解に出ていないというのが1点ですね。

それからもう1点は、この実現のための基本姿勢については、おっしゃるようにガバナンスの議論のほずで、そういう議論をしていたと思うのですが、今回、その言葉がほとんど、これを見る限り、はっきり出てきていないのですけれども、この辺はどうなんですか。たしか起草委員会でも協働ということで、市民、企業、それから行政、そういうものが協

働してこれからこういうまちをつくっていくんだという議論をしたはずですけども、そのことがあまり明示的に出ていないような気がします。

【事務局】 今、部会長がおっしゃったとおり、起草委員会で、今後、行政だけが公共を担うのではないということで、ガバナンスの中でどのように取り入れていくかというお話がありました。それで、今回の案として11ページで横浜市の基本姿勢としているものは、一応、横浜市総体としての横浜市の基本姿勢ということで、行政だけではないイメージでつくっております。ただ、その中で2つに分けておりまして、都市の経営、内部的なもの、あと、後段のイは外に向けて近隣自治体との連携等ということで分けておりまして、内部的なものがどうしても、行政の改革といいますか、持続的な財政運営というところがちょっと強いものですから、イメージ的に、行政機関がという主語をあえて置かせていただいて、つくらせていただいているところがございます。ただし、全体としては、その前のページの「私たち事」のところも含めてですが、市民が今後どうガバナンスに参加していくか、その協働の姿勢は盛り込みたいということで、案はつくっておりますが、その割り切りの仕方で少し誤解を受けるようなところがあったのかなと思っております。

【部会長】 私は発想がちょっと違うと思う。市が中心になって、そこに市民が参加していくという感じで、まだ書いていますよね。そうじゃないと思います。

【委員】 むしろ、ともに担っているわけですし、自治体があって、そこに市民が参加するというよりも、我々も主体としてそこにかかわって形成をしているということだろうと思います。

【部会長】 そういう議論を起草委員会でさせていただいた。今日、この後で第3部会の部会長とお話し合いをするということですので、これからまだいろいろご意見をいただくといいと思いますが、この2部会の意見をぜひお伝えいただきたいと思います。

【事務局】 以前にも、この部会で委員から、市民と企業と行政、3つの主体が連携してというお話をいただいておりますので、第2部会からの意見ということで既にお伝えしております。ただし、この部分は最後に残ったところとして現在も議論しているところとして、今日この後打ち合わせしまして、14日に第3部会が開かれますので、そこで第2部会、また、第1部会からの意見も含めて議論していただきたいと考えています。28日の第3回起草委員会には、その意見も踏まえて、事務局で考え方をもう一回整理した上で、最終的な議論をしていただこうと考えております。したがって、お気づきの点がありましたら、当部会におきましても遠慮なくご指摘ください。

【部会長】 今の関連でも結構ですし、ほかの問題提起でもいいんですけども、ぜひ活発にご意見をいただければと思います。いかがでしょうか。

【委員】 このとりまとめを読んで1つ思ったのは、情報の循環とか、情報の交流が二の次になっているのではないかと思います。情報の循環はもっと重要な役割になったほうがいいと思います。この審議会でも少子高齢社会や在日外国人の問題など、日本や横浜を取り巻く重要な問題を議論していますが、そうした問題等を解決に導くのは情報やコミュニケーションだと思います。行政、企業、市民の役割はどういう形であるべきかについても、それぞれの主体をつなぐのは情報だと思います。とりまとめでは、9ページに、(10)「活発な情報交流により新たな可能性を創造していこう」と書いてありますが、一番最後になっており、しかもコメントが少ないので、もう少し情報の役割を強調したほうがいいと思います。

【部会長】 10番目に、新しいカテゴリーとして、「活発な情報交流により」と書いてありますが、中身がちょっと情報のツールの話に、技術とか、知識とか、そういう方向に傾き過ぎていると思います。そもそも、委員がおっしゃるように、市民がいかに情報を円滑にネットワークし、情報交換をできるか、あるいは、情報をどのような形で発信できるかというところがまずあって、ツールとしてのさまざまな技術とか、そういうものは、それは助ける手段であるという関係がわかるように書いておいたらいと私も思いました。こちらのA3の資料は若干それに近い書き方がされています。活発な情報交流、情報交流だけじゃなくて、情報をつくり出して情報交流をしなければならないことは書かれていないのですけれども、こちらのほうが少し情報そのものの重要性に触れているように思います。

【部会長】 またご意見があればいただきたいと思います。それでは、どうぞ。

【委員】 ありがとうございます。幾つかポイントを挙げさせていただきたいと思います。7ページの6番ですが、「世界の平和や貧困」という表現がありますが、「貧困」という言葉は、例えば、都市が抱えるさまざまな問題とか、そういうふうに変えたほうがいいのではないかなと思います。

【委員】 経済格差という表現がいいのではないかな。

【委員】 はい。経済格差とか……。

それと、最後のアジア太平洋のところですけども、アジアを中心に考えると、福岡や北九州の方がアジアに近いんです。でも、横浜がユニークなのは、アジアと太平洋の真ん中に位置しているところなんです。福岡とか、北九州は今アジアが中心ですけども、横

浜は、アジアにもアクセスできるし、太平洋地域もすごく近いと思います。だから、例えば、アジア太平洋地域を結ぶかけ橋になりましょうとか、そういう橋、ブリッジという役割は横浜しかできないと思いますので、そういう表現をいれられたらいいのではないかと思います。

それと8ページの7番ですけれども、できれば、ユニークなこととか、文化のこともどこかに書いたほうがいいかなと思います。

次に8番ですが、人々が横浜を愛する気持ちがあるから、楽しく住むことができるのだと思います。私たちのビジョンは、やはり私たちが横浜を愛することであり、横浜を愛するから、このビジョンができています。ですから、もっと横浜を愛するというような表現を入れたほうがいいのではないかなと思います。

【部会長】 貧困の議論は、よくわかりました。表現を変えたほうがいいだろうと思います。また、アジア太平洋の議論は、実は、起草委員会の明石委員長がこのことをぜひ入れてほしいということなのです。ところが、この部会の意見は、それもわかるけれども、やはりアジアが重要だという意見を前回いただいたので、表現的にはアジア太平洋都市の一員として世界に目を向け、その上で最後、アジアとの連携を強化しますということで、事務局がまとめたんです。どういたしましょうか。

【委員】 橋とかブリッジというような言葉を入れられたらいいと思うのですが。

【部会長】 単なる一員ではなくて、横浜市は積極的にそれをつないでいくということですね。

【委員】 はい。つながっているという感じです。

【部会長】 なるほど。そういうことをもっとしっかり書いたほうがいいと、そういうご意見ですね。

【委員】 はい、そうです。

【委員】 今のに関してちょっといいですか。

【部会長】 はい、どうぞ。

【委員】 横浜は、昔からアジア太平洋地域、環太平洋地域の交流拠点ということでやってきたわけですがけれども、当面のターゲットとしては、アジア地域への技術力の貢献だとか、企業との連携だとか、さまざまな貢献ということになると思います。ただ、横浜の歴史を考えたときに、アジア太平洋地域というのは、どちらかという、生活に密着していることは確かだけれども、むしろ西洋文明の窓口として、ガス灯や瓦など、ヨーロッパの

いろいろな文化を受け入れて発展してきた過程があるわけです。だから、環境問題だとか、いろいろなことでヨーロッパとの提携、連携というものも、当然、私は今後の横浜が発展する上で不可欠な視点だと思っています。だから、そういう意味で、どう表現していいのかわからないけれども、かつて生糸の検査技師がリヨンから横浜に来て、横浜から製品が輸出されるようになったように、横浜の発展という意味で避けて通れないのが、ヨーロッパの力なのだと思います。それをどうやってこのビジョンの中に生かしていくかというのはあると思いますが、うまい表現の仕方があればいいなと思っています。

【部会長】 さらに複雑になりそうな感じですね。確かに横浜は、開港のときもかなりヨーロッパの文化ですよ。横浜の文化というのは、かなりヨーロッパの文化の影響を受けていて、戦後はむしろアメリカの影響がかなり強いかもしれない。表現方法はいろいろ考えて生きたいと思います。

【委員】 もう1つ、昔は港の関係でドイツのハンブルグと友好港というか、提携していたんです。今、フランクフルトに駐在事務所を置いていますけれども、ニューヨークにも置いていますよね。アジアには上海しかないんです。アジアとの連携は必要だけれども、いろいろな国際機関の誘致だとか、国際イベント、スポーツ、サミットなどもそうですが、やっぱりそういった欧米の力がなければ、なかなか世界の競争力に勝てないと思います。欧米との連携は横浜の発展にとって不可欠なんです。理念としてはいいけれども、現実問題として、そういったグローバルな視点というものがどうしても必要だろうと思っています。グローバルというのは、環境の地球規模じゃなくて、そういった都市間のグローバルな視野ということだと思いますけれども。

【部会長】 関連ですか。

【委員】 今の話を広げていくと、整理するのが大変だと思うんですけども、国際都市横浜と言ったときに、対象が世界であることは言うまでもないことだと思います。ここに書いてあるのは、アジア太平洋地域の一員として、1つそこに重きを置いて、役割としてというような意味あいでも強く打ち出しているわけですので、この表現でいいのではないかなと思います。国際都市横浜と言ったときは、何もアジアと太平洋だけのことを考えているという意味じゃないと一般的に理解できると思うんです。ただ、アジア太平洋の一員だということをよく理解しましょうと、よくそこを踏まえましょうと、ましてや、アジアとの連携を強化しましょう、ということを行っているのであって、私は大変結構であると思っています。このアジアとの連携を強化するということを言えば、先ほどお話のありまし

た結びつけの役割を果たすという役割は言外に入っていると思います。一員としてアジアとの連携を強化するんだと、当然その中でリーダーシップを発揮しますという意味だと思います。今、委員がおっしゃったようなことは十分に入っていると思いますので、私はこのままで大変結構だと思います。

【部会長】 どうぞ。

【委員】 今日の資料を拝見いたしまして、どうしてもこうした長期ビジョンというものになりますと、どこの町が、どこの都市がつくっても同じようなものになりがちの中で、横浜らしさを将来像の2つの柱の1つに積極的に掲げて、それなりに横浜が書いたものだというのを、どこを読んでも少しは忘れずに読めるものになっていて、大変ご苦労されたのではないかと思います。その中で2点ほどちょっと気がついたことを申し上げます。

1つは、この第2部会に関係あるところで、この横浜らしさというものが、これが横浜らしさだという物でアピールするのではなくて、異なった多様な人の交わりから生まれてくる活力というようなことに横浜らしさを見出している、人の交わりに横浜らしさを見出しているというところが大変ユニークな視点で、インパクトがあるように感じました。それに関してもう1つ欲を言わせていただきますと、横浜らしさを横浜から発信する、つまり、出すほうに重点が置かれていて、入ってくるほう、引きつけるほう、吸引するほうの表現があってもいいのではないかなと思います。例えば、横浜の将来像のところでは、横浜らしさが出ていく話ばかりが書かれていて、入ってくる話が入っていない。循環というような考え方でいきますと、出てきてこそ入っていくという、交流、循環という言葉がもう少し出ていてもよいのではないかなと思いました。

もう1つは、先ほどから議論のあります新しい公共と関係のあるところですが、市民力には個人と集団と2つあると思うんです。当然、これは市民で共有していきましょうという長期ビジョンですので、1人ひとりというのが非常に強調されているのだと思いますが、1人ひとりに期待するのがすごく大きくて、市民のコレクティブな団体としての力というものあまり評価していない、すごくそれが薄らいでいるのではないかなと思います。細かいところを読んでいきますと書いてあるんですけども、冒頭の「はじめに」のところ、市民団体やNPOという言葉が入っているにもかかわらず、本文の中を見ると、1人ひとりが市民力を持ちましょうということが強調されているように思います。例えば、実現の方向性の中で、(5)の「ゆとりをもって安心していきいきと暮らそう」とありますが、それは1人ひとりみんなそう願っておりますし、また、8番の「便利で快適な暮らしや

すく働きやすいまちをつくろう」というのも、みんなそう願っていますけれども、1人の市民力ではどうにもならず、必ず市民団体あるいはNPOの力になって、初めてそうしたものが実現可能に近づくのではないかなと思います。ですから、コレクティブな市民というのがもう少しどこかに出てきていてもいいのではないかなと思います。それがより強く感じましたところは、実現のための姿勢のところ、他方に市民に対して企業というものが出てきますが、企業も市民のコレクティブな1つの団体であるわけですから、企業に対して市民1人の市民力というのではアンバランスを感じまして、これは「私たち事」という言葉とも絡んでくることではあると思うんですが、NPO、市民団体というものの力というのがどこかに出てきてよいいのではないかなと感じました。

【部会長】 出すほうだけではなくて、引きつける、吸引するほう、確かに横浜はいろいろな文化を吸収するところにたけていたという面が非常にあったはずですよ。その辺はどこかにきちっと書いておく必要がありますね。多様な文化が入ってくる、それをうまく吸収して、新しい横浜の文化をつくったり、あるいは交流していくという、それは先ほど委員がおっしゃった話とつながるわけですね。そういう表現をむしろ積極的に入れるべきではないかというご指摘だろうと思います。それは確かにそのとおりかもしれない。

2番目の話は、確かにおっしゃるとおりで、私はそのことが「私たち事」なのかと思いましたけれども、ただ、これをよく見ると、やはり私ごとを1人ひとりが考えるという、1人に還元してしまっているんですね。それでは「私たち事」というのは何なのかというのも、1人ひとりが主体的にその解決に向けて取り組みますという形で、またばらされてしまっているんで、むしろ、この1人ひとりにばらされる以前の「私たち事」、それに取り組む私たちが、極めてこれからの社会では重要で、それがあつた部分、まだ新しい公共と言われているけれども、これからはまさに公共のある領域を担うのであろうというような表現を入れられれば、先ほどの委員との話ともつながるのではないかなと思います。

どうぞ。

【委員】 今の発言も関連するかなと思いますけれども、3ページの都市像のⅡについて確認だけさせていただきたいと思いますが、世界の知と人材の交流拠点都市、世界の知という素晴らしい言葉が出てきたんですけども、横浜は海外の文物文化を取り入れながら発展したまちであり、これからもそういう魅力ある都市づくりをしなくてはいけない、人材も横浜に集まってくる、そこまではいいんですが、これからはどういう知を世界に発信していくのかということです。それは、今の時点で答えられるのか、答えられないのか、私

もわからないんですが、国際都市横浜らしさの1つの魅力づくりにもなるのだと思いますが、どんな知なのかということなんです。この時点で議論できるのかどうかわかりませんが、ただ、世界の知と言われたときに、これを市民が見たら、どのような知なのか、どんな分野なのかなという、ちょっと違和感があるのではないかなと思います。

それから、11ページの一番最後のところです。「開港以来、技術や生活様式を諸外国から受け入れ、豊かさを達成してきたことに対する世界への恩返し」という表現がありますが、何も恩返しのために横浜は発展するわけじゃなくて、そういう歴史性を持って、横浜がその存在感や特色あるまちづくりをしなければ、横浜自体、存続といたしますか、国際間の競争の中で生きていけないという時代に入りつつあるわけです。恩返しをやる時代ではないんです。とにかく、横浜が将来に向けて日本の中の都市として、先導的にさまざまな分野に取り組んでいくということが横浜の存在意義になるわけですし、何も恩返しのためではなくて、横浜という魅力をもっともっと高めるために、今、働いているんだと思っています。この言葉に違和感がありましたので言わせていただきました。

【部会長】 知の問題は、例えば、横浜国大は国立大学の中で経営学部を持つ2つのうちの1つです。たしか小樽商大と横浜国大しか経営学部がなくて、他の大学は経済学部だけだと思います。経済と経営というと、経営は若干低く見られていたという歴史がありました。経済というのは知の中の知識で、経営というのは知恵だという話があるんです。学問の世界では知恵を軽く見てきた。ただ、実践性から考えると、実は経営学のほうが重要であって、最近では経営学のほうが場合によっては経済よりも大きな顔をするような、そういう世界になっておりますが、横浜はそういう実践的な知、おそらくそれは知恵だと思うのですけれども、そういう実践的な知を重要視してきた、おそらくそういう社会ではないかと思います。また、知識の中にはカテドラルのように高みを追及する知と、それからバザールのようにいろいろなものが集まって、混在して生まれる知と両方あって、知識がカテドラルで知恵がバザールだという表現をしている方がいらっしゃるけれども、おそらく横浜はバザールなんです。カテドラルをつくろうと思ってきたわけではなくて、バザールとしての知を横浜はずっと持ってきたから、そういう意味での知だと私は思っています。そういうことではないでしょうか。

【委員】 細かいことを幾つか申し上げますが、11ページの上のほうで、「国などの関与からの一定の独立性」という言葉がありますが、この関与という言葉はもう一回考えなければいけないのではないかなと思います。これは20年先のことを展望しているわけで

すから、関与という言葉がそのときも通じるのかなと思います。

それからもう1つ、自立と責任ある都市経営という項目の中で、「自らの責任で政策を考え」とありますが、これは心構えとしては立派なことであり、間違いないことですが、やはり横浜市も国という行政体の中の一員であるという役割もあるわけですから、その辺のところもどこかに入れないといけないのではないかなと思います。例えば、今、基地の問題などが出ていますけれども、基地の問題は反対というだけで終わってしまう可能性もなきにしもあらずですが、広い視野で考えなければいけないという行政の役割も都市経営の中ではあるのだと思います。

それから、その次の「持続可能な財政の確立」は書く必要があるのでしょうか。20年先も持続可能な財政の確立という問題が残っているのか疑問です。財政の問題を横浜市の基本的な態度の中に書く必要があるのか、これはもう一回お考えになる必要があるのではないかなと思います。

それから、その先で、自治の推進について書いてありますが、これは大賛成であります。私たちが身近な云々ということで、分権ということをはっきりここであらわしていること、横浜は地方への分権が確立した社会を目指すということをお中であらわしているということは意義深いと思います。そのことに伴った新たな大都市制度、これは中身はまだないのだと思いますけれども、それをつくりましょうという意欲を非常に高く感じまして、私はうれしく思っております。

それから、横浜市はものを受け入れるのに非常におおらかだとか、謙虚だとか、そういう風土があったんです。やはりそういう謙虚さというのを市民が持っているということが大事なことなのではないかなと思いますので、どこかに謙虚とか、何かそういうような言葉が入るといいのではないかなと思います。

それから、これは大変細かいことで申しわけないんですが、10ページの「市民がいきいき働けるよう新しい働き方」という表現がありますが、これは何をいつているのか企業家としてはよくわからない。生き生きと働けるような働き方については、新しいというだけでなく、何かいろいろと意味があるのだらうと思いますので、もう少しいい表現にしたほうがいいと思います。

それから、もう1つ、今度は8ページに戻りまして、「空港、港、道路、鉄道が一体的に機能するまち」という表現がありますが、このまちの中には、市街地は入っているのでしょうか。市街地という機能、西口とか東口とかという機能は、横浜市で生活をしていく場

合に非常に大事な機能であると思っております、この機能も一体的なというところに含めて考えないといけないと思います。この市街地というのは、そこで仕事をしている人が利益が上がるとか上がらないとか、にぎわいだとかというだけではなくて、都市としての非常に重要な機能だと思いますので、市街地、中心市街地や副都心等、これについては横浜市も都市計画、都市政策の中で非常に重要だと考えるという意思表示をしていただきたいと思っております。

あと1つ、11ページのところに、都市経営の進め方という項目の中で、企業などの活力が最大限発揮される環境づくりを都市経営のテーマにしているのですが、企業の活性化に向けた環境づくりをするということをもう少し強調する必要があるのではないかなと思います。これは企業に金もうけさせる土壌をつくってくれという意味ではなく、市民団体と同じように、企業団体もこういう環境づくりが必要だということをみんなが理解するというのを、もう少し強くどこかにあわせないかなと思います。

もう1つ、すいません、横浜市民というところに、資料の2では、括弧して個人や企業と書いていただいています。資料の中の市民という言葉の中に、個人の市民や市民団体という意味で使われている場合と、企業などを入れた市民という場合と、2つの市民という言葉を使っているように思います。これについては整理が必要ではないかなと思います。

以上、ばらばらと申し上げましたけれども、よろしく申し上げます。

【部会長】 ありがとうございます。それでは、ほかにご意見がありますか。

【委員】 先ほどの国際都市間の連携や交流という部分で、青年会議所で言ってきた都市間FTAという概念は、相手の都市がそれぞれに特徴や地域性がありますので、それぞれの都市ごとに、違った形で連携していくというものです。アジアの都市とはアジアの都市なりの連携があると思いますし、ヨーロッパの都市とはヨーロッパの都市との連携があると思います。環境に対しても、中国との連携とヨーロッパの都市との連携では、連携の仕方が違うと思います。ですから、都市間の連携というのは、一律に図るのではなくて、いろいろな都市とそれぞれに個別に違った形での連携を図っていく必要があると思いますので、都市間ごとに1つ1つの都市同士でいろいろな協定を結びましょうというのが考えていたことでしたので、そういう表現を入れてもらえると、先ほど言っていたアジアだけじゃないとか、アジア太平洋も含むとか、ヨーロッパやアメリカも含むということにも対応できてくるのかなとも思いました。

それともう1つ、先ほど世代ごとの役割ということで、それぞれのライフステージの中

での人の生き方みたいなことのお話をされていましたが、そのライフステージごとというのが縦軸だとすると、横のつながりという横軸も必要ではないかなと思います。例えば、仕事をしている人間にとっては、今は仕事をしている時間がかなりの部分を占めているわけですが、これから20年先になってくると、もっと仕事だけではなくて、地域のことや社会貢献活動、家庭のこと、学校とのかかわりなど、いろいろな意味で横のつながりというものを大切にしていかなければならない時代になってくるのではないかなと思います。そういった視点も1つ入れてもいいのではないかなと思いました。

それと、これから先20年後の企業の生き方という部分で、企業としてきちんと社会的な責任を果たしている会社がちゃんと利益が得られる仕組みづくりが必要なのではないかなと思います。そういう意味で横浜型スタンダードというものを意見集の中に入れていただきましたけれども、企業として、雇用や環境、廃棄の問題などさまざまなことで社会的な責任をしっかりと果たしている会社に対しては、行政的なバックアップもしたらいいと思いますし、市民の意識の中でも、そういう会社で働きたいとか、そういう会社でつくっている製品はきちんと購入しようというような世の中になればいいと思います。そういう意味で、きちんとした責任を果たしている会社はちゃんとバックアップしていきますよとか、そういう会社が伸びていける社会をつくっていきましょうというような視点も必要なのかなと思いました。

それと、グローバルとはあまり関係ないのですが、全体的な中で1つ欠けているのが、スポーツや体育という視点ではないかなと思います。横浜には、野球とサッカーのプロチームがありますし、日本で最大の競技場もあり、水泳の世界的な大会も引っ張ってこようとしているわけです。横浜は、そういう一流のアスリートを間近に見られるという機会もあり、身近にスポーツがあるまちだと思いますので、小学校から一生涯かけて、運動やスポーツに携わっていくことによって、病気になる人の治療よりも、病気にならない人をどんどん増やしていく、いつまでも元気でいられるまちづくりという視点もどこかに入れていただけると、横浜らしさの一つになるのではないかなと思いました。

以上です。ありがとうございます。

【部会長】 最後のところは、確かに医療までは7ページの(5)ゆとりをもって安心していきいきと暮らそうというところに入っているけれども、確かにスポーツとか、体育という言葉は入っていないですね。

どうぞ。

【委員】 青少年問題がどうしても空白地になってしまい、なかなか対策がとれない、そしてまた、幾つかとって、なかなかそれがしっかりとマッチングしないという経験を私個人としても持っています、この青少年問題については、もう少し具体的に詳しくビジョンを述べてもよいのではないかなと思います。

それから、今回のこの長期ビジョンは20年後を展望するものですので、今の子供たちがどう国際的に、また、どう横浜らしさを感じられるかということが大切であると思います。横浜に生まれてよかったなと、横浜にいてよかったなと、横浜という都市をほんとうに実感できるという、これが一番大きなポイントではないかなと考えますが、子どもを温かく見守りのびのび育てようという5ページのところ等を見ますと、子育てしやすいとか、子育てを支援するとか、いわゆる大人の視点で子育てを見ているように思います。子供の問題について、我々大人が考えていますから、なかなか難しいんですけども、もう少し子供の目線からのさまざまなビジョンを描き、子供から見た施策をしっかりと打ち出していく必要があるのではないかなと思います。そういったことから、具体的にどうかと言われてもなかなか難しいんですけども、子育てしやすい、子育てを支援する、つまり、現在ある厳しい状況を何とか子育てしやすいようにしましょうという発想ではなく、生まれてくる子供の目線から、横浜市はそろそろさまざまな施策を考えていかなければならないのではないかなというように感じました。

以上、子供の目線ということと、それから青少年問題について、もう少し膨らませていただけないかなということのご意見とご要望をさせていただきます。ありがとうございました。

【部会長】 確かに子供という言葉があつて、あとはいきなり学びとか、働きという話があるんだけど、その過渡期の中学生、高校生あたりの青少年というレベルの議論があまり明解ではありません。これは第1部会の部分になりますけれども、我々の立場から言うと、その辺が今、いろいろ課題を抱えている部分でもあるように思いますので、意見としてお伝えいただきたいと思います。

【委員】 今のに関連してよろしいですか。

【部会長】 はい、どうぞ。

【委員】 冒頭、私は世代間のあるべき姿という観点から意見を申し上げましたけれども、この長期ビジョンについては、細かい内容はわからないにしても、20年後のあるべき横浜の姿がわかるような小学生版あるいは中学生版を、小学生といっても低学年用、中学年

用、高学年用と分かれるかもしれませんが、そういったものをつくり、学校教育の中にもこれをやっぱり組み入れるべきだと思います。特に中学生は、ある程度大人が読むようなものでも理解できると思います。そういう意味で、私は先ほど子供たちの役割という観点からお話を申し上げた次第です。今、委員がおっしゃっていた青少年の問題ともリンクしていくのではないかなと思います。

【部会長】 先日、中学生から意見募集したり、いろいろシンポジウムをやられたんですよね。ちょっとその辺を紹介いただけますか。

【事務局】 小学生には20年後に住みたい町をイメージした絵を募集しまして、1,100件ぐらいの応募作品から優秀作を6点選び、中学生は長期ビジョンのスローガンを募集しまして、300件ぐらいの応募作品の中から6点、それから、高校生には論文募集ということで、900件ぐらいの応募作品の中から6点それぞれ優秀作を選びまして、先日、11月3日に市長から表彰させていただきました。

実際に子供の側、特に高校生の論文などをもう一度見まして、実際、視点が変わった場合にどのような感じなのかを、もう少し検討させていただきたいと思います。

【部会長】 せっかくやったので、生かしたほうが良いと思います。

【事務局】 それから、市民への最終的な紹介のときには、今、委員がおっしゃったような小学生版などについては、どこまでできるかわかりませんが、できるだけ子供とか、学生の皆さんにも見ていただけるようなメディアを考えていきたいと思います。

【部会長】 どうぞ。

【委員】 実は、このとりまとめの全体構成を初めて読んだときに、総合的な骨格としてはいいんですけども、言葉の選択とか、口調にあまり個性がなくて、どこの都市でも同じことを言っているような内容になっているので、もう少し横浜らしさとか、個性を感じられるインパクトのある言葉とか、口調にしたらいいのではないかと思います。なるべくいろいろな人からの意見を聞いて、横浜全体の長期ビジョンにするためには、中立的な立場をとるのは重要だと思いますが、これを読んでいておもしろくないと思いました。簡単な例を挙げますと、実現の方向性の1番に、「生活満足度の高い」と書いてあるんですけども、これは具体的に何を指すかがわからないので、その次に括弧して横浜は笑おう、歌おう、走る、遊ぶ、育つことができる町とか、いろいろな遊び方、いろいろな生活の方法とかをもう少し肉づけというか、味つけをすればいいのではないかと思います。

次に、これは別の件ですけども、こちらの起草委員会のとりまとめの10ページに、

実現のための基本姿勢のページの真ん中に、企業の基本姿勢のところに書いてあるんですけども、地域社会へ参加し、貢献するとか、市民がいきいきと働ける新しい働き方の提案と書いてあるんですけども、このような表現にすると、企業が無理をして我慢をしなくてはならないようにとらえられてしまうと思いますので、企業の構造を変えることによって、いろいろな新しいビジネスチャンスが出てきたり、利益が上がったり、企業としていろいろなメリットがあるというような積極的な表現にしたほうがいいと思います。例を挙げますと、市民が生き生きと働ける新しい働き方の提案や雇用機会の提供に努めることによって生産性を上げる、企業の利益を上げるというような表現にしたらいいと思います。

以上です。

【部会長】 このA3版の資料はどこかに生かすんですか。整理のためにつくっているんですか。その辺がちょっとよくわからない。

【事務局】 今日の議論がしやすいように、あくまで整理のために作成したものです。最終的に出すのは冊子になっているほうになります。

【部会長】 冊子ですね。これは最後は残らないんですか。

【事務局】 残らないです。

【部会長】 この資料だけ読んでも確かにおもしろくないですね。

【委員】 横浜市だからといって、横浜市の個性が全部に出るとするのは難しいと思うんです。どこの都市でも普遍的に同じ目標というのはあるわけで、それが基盤として最初に語られているということは別に問題がなくて、そこに無理に個性を盛り込もうということは必要はないのではないかと私は思います。ただ、先ほど委員がおっしゃったように、例えば情報というものの位置づけを、最後に来るのではなくて、基本的な生活基盤、生活インフラとして、住み続けたいと感ぜられる魅力などと同じぐらいの位置づけにすると、大分違った特色が出てくるんじゃないかと思えます。並び方を変えるのは難しいでしょうが。

【部会長】 いや、並び方も起草委員会でいろいろこれから議論することになります。

【委員】 そうですか。特に、この交流であるとか、港という出入りの激しいということ横浜らしさとしてうたっているのですから、生活基盤としての情報というものをそれにつなげて語ると、まとまりがよくなるのではないかと思います。

もう1つ、かけ橋というお話がありました。これもこの長期ビジョンの1つの個性として生かせることではないかなと思います。横浜はこれだという1本のカテドラルみたいな、そういうものではなくて、先ほどアジア太平洋というところでもいろいろ出ていまし

たけれども、それが東洋と西洋の結節点なのか、かけ橋なのか、いろいろなものとのヒンジというか、結節点であったり、活性化し、それをむしろ港という言い方にすればいいのではないかなと思います。何かそういう1つのもののセンターとかではなくて、2つのものの間に位置する要所みたいな、それを前面に出すというのは1つあるのではないかと思います。

【部会長】 これは、どちらかというメインキャッチフレーズのイメージですね。どうぞ。

【委員】 今委員がおっしゃったとおり、人と人が交流する、これは歴史的に見ても、地理的に見ても、横浜の特徴になります。そういうものが交流する、情報も交流する、そして、それが都市として、かけ橋の役目も果たすような、そういう機能を持った都市というようなことにくっつけていくと1つになる。横浜は歴史的に見ても、港にとっても、今申し上げたあたりは特徴的です。なるほど。

【委員】 言ってみれば、都市の基本ではあるんですけども。

【委員】 当たり前のことなんですけれども、横浜という都市にあえてくっつければ、港もあるし、歴史もそうになっているじゃないのと、やろうよということになれば、普遍的じゃないのかもしれない。今のお話を大変興味深く聞きました。ありがとうございました。

【部会長】 極めて根源的な都市のあり方です。都市はそもそもそういう形で生まれてきたわけですから。この辺をうまくどう表現するかというのは、おそらくメインキャッチフレーズのところだろうと思います。いろいろご意見をいただいていますから、起草委員会で少し議論させていただきたいと思います。

大分ご議論させていただきましたので、まとめて何か事務局でお話があれば承るし、さらに意見交換をしたほうがよければ、そうしますけれども。

【事務局】 今日の意見も1つ1つ整理させていただきますが、3つの部会がございますので、それぞれ今日と同じ資料で意見をいただいたうえで、もう一度再整理させていただきます。28日に第3回の起草委員会がございますので、そこで、先ほどのメインキャッチフレーズも含めまして、全体の1つの案として固めまして、それから、12月6日の総会で最終答申ということになります。

【部会長】 たまたま我々が最後の部会としては最初に開いていますので、できましたら、今日出された意見のうち、第1部会、第3部会にかかわる意見についてはそれぞれの部会でご紹介いただけませんか。第2部会でこれをトータルに見たときに、こういう意見が出

ましたという形でいいと思うんですが、直接第1部会でこうだということではなくて、第2部会が全体を見たときに、全体についてこういう意見が出ましたということをご紹介いただいたうえでご議論いただくと、第1部会、第3部会の議論が我々の議論と少しかみ合った議論になって、起草委員会も議論がしやすくなると思うので、そういう努力をお願いします。

【事務局】 わかりました。そういう形で進めさせていただきます。

【部会長】 ほかに何か。

【委員】 答申の体裁はこれでいいわけですか。それぞれの部会での意見も資料として添付されるんですか。

【事務局】 今日の意見も、個々の構成とか表現に係るものは別ですが、内容に係る新しい要素みたいなものは、後ろの資料編に加えていきたいと思います。

【部会長】 体裁としてはこれですね。

【事務局】 はい、そうです。

【部会長】 次回の起草委員会で最終的な起草委員会としてのまとめがあって、それほどこかへフィードバックすることなく総会に行ってしまうということですか。起草委員会が28日ですから、あまり時間がありませんね。28日の起草委員会までに、もしご意見があればご意見をいただいて、起草委員会でその意見も含めて答申案を作成させていただきたいと思いますので、そのような形でプログラムを考えさせていただきたいと思います。

ほかによろしいでしょうか。もし、よろしければ、かなり闊達なご意見を、しかも重要なご意見をそれぞれいただいたと思いますので、事務局でおまとめいただいて、最終の起草委員会に、今日の意見を生かしたような形でまとめたものを出していただきたいと思います。もし、メインキャッチフレーズにいい考えがあれば、ぜひそれもお帰りになってからいただければ、起草委員会としてはありがたいので、よろしくお願いします。

それでは、まだ総会がありますけれども、第2部会としては最終の部会になりますが、長い期間にわたって、かなり密度の高い議論をしていただき、しかも、先ほど開会する前にお話がありましたが、あの部会は熱いときがあったなという思い出を残しつつ、終会にさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

— 了 —